

タイトル

ゴージャスお宝鑑定家〜う〜ん、ゴージャス！〜

## 登場人物

剛田（ごうだ）：剛田質店の店主。

ゴージャスな品物しか興味がない  
優雅でクセの強い鑑定家。

白金（しろがね）：剛田質店の見習い鑑定士。現実的な性格で、剛田の奇抜な価値観に振り回される。

客（複数名）：ゴージャスな品物を持ち込む個性的な来店客。

謎の競売人：最後に現れる重要な登場人物。

あらすじ

ゴージャスな品物しか扱わない剛田質店に、新たな依頼品が舞い込む。それは何と「エメラルド製のしゃもじ」。剛田はこれを「ゴージャスの極み」として大絶賛するが、見習いの白金は「そんなものに価値はない」と猛反対。二人の意見が激しく対立する中、この品物には実は驚くべき秘密が隠されていた……。

シナリオ

シーン： 剛田質店の朝

（剛田質店の豪華な内装が映る。壁には金色の額縁や高価そうな装飾品が所狭しと並んでいる。）

剛田（ゆったりとした動きで登場し、優雅に椅子に座る）

「さて、本日も華麗なる品々を迎え入れる準備が整った。おお、ゴージャスたるもの優雅たれ！」

白金（手帳を持って現れる）

「おはようございます、剛田さん。今日こそは普通のお宝が来ることを祈りますよ……」

剛田（微笑みながら）

「白金くん、普通？そんなものに時間を割く暇はない。ゴージャスな品だけが私たちの価値だ。わかるかな？」

白金（ため息）

「はあ……。でも先週の『黄金の靴下』、あれ本当に必要でしたか？」

剛田（劇的に身振り手振りを交えて）

「あれは靴下界の革命だ！ゴージャス！」

白金（ツツコミを入れるが、その瞬間、店のベルが鳴り、客が入ってくる。）

シーン：エメラルド製のしゃもじ

（派手なスーツを着た中年の客が、大事そうに木箱を抱えて入店する。）

客

「これが我が家に代々伝わる秘宝、『エメラルドしゃもじ』でございます！」

剛田（目を輝かせて）

「おおおおお！なんと美しい！これぞゴージャス！」

白金（驚愕して）

「ちょっと待ってください！しゃもじですよ？食器ですよ？」

剛田（しゃもじを手に取り、まるで王の  
剣を掲げるようなポーズ）

「白金くん、これをただのしゃもじと思  
うのは凡人の発想だ。この輝き、この曲  
線美……これぞ人類の叡智が生み出した  
究極の道具！」

白金（小声で）

「ただの高価なガラクタにしか見えませ  
んけど……」

剛田（熱弁し始める）

「白金くん、聞きたまえ。このエメラル  
ドの石言葉は『知恵』『幸福』『永遠』  
だ。こんな石で作られたしゃもじが、ご  
飯を盛る度にどれだけの幸福を運ぶか想  
像したまえ！」

白金（呆れ気味に）

「それで、ご飯が美味しくなるとは思え  
ませんけど……」

（剛田、突然思い立つようにキッチンに向かう。）

剛田

「実験だ！このしゃもじでご飯を盛ってみようではないか！」

（剛田が炊きたたのご飯をしゃもじで盛る。ゆっくりと茶碗に移す仕草は、まるで神聖な儀式のようだ。）

剛田（瞳を閉じ、一粒一粒を舌の上で味わうように食べる）

「こ、これは……普通のご飯なのに、何という深みだ！一粒一粒が輝き、まるで宝石のようだ……！なんだこの感動は！？」

白金（恐る恐る一口食べる）

「え、ええ！？……何これ？なんだか本当に……美味しい？いや、錯覚だ！絶対に錯覚だ！」

剛田（目を輝かせ、立ち上がる）

「白金くん、これは錯覚ではない！このしゃもじが持つ『幸福』の力だ！見よ、この完璧なツヤと香り！」

（カメラが炊きたたのご飯にズームイン。湯気が立ち上り、艶やかな表面がライトに反射して輝く。視聴者も思わず空腹を感じるような描写。）

剛田（さらに興奮して）

「いや、これはただのご飯ではない！ゴージャスライスだ！おお、ゴージャス！」

（さらに、剛田は次々と料理を盛り付けていく。カレー、寿司、卵かけご飯……すべてが美味しそうに見える描写が続く。）

白金（ツツコミを入れつつも、完全に引き込まれている）

「これ……ほんとにすごいかも……」

シーン③：依頼人の背景

客

「実はこのしゃもじ、かつて祖父が古代の遺跡から持ち帰ったものなんです。その価値はよく分からないのですが……どうしても手放さなければならなくて。」

白金

「事情がおりなんです……でもしゃもじにこんなに思い入れがあるとは。」

剛田（感動しながら）

「それほどの思いが込められているなら、なおさらゴージャスな存在だ！」

客（ためらいながら）

「実は、家族が経済的に困っていて……でもこのしゃもじだけは、ずっと守りたかったんです。」

（剛田、目に涙を浮かべる。）

剛田

「家族の絆を繋ぐこのしゃもじ……素晴らしらしい！」

金額発表とリアクション

（剛田、金額を発表する。）

剛田

「このエメラルドしゃもじ、買取価格は……1000万円！」

白金（驚いて）

「せ、1000万！？しゃもじ一つで！？」

剛田

「これはただのしゃもじではない。幸せをもたらすゴージャスしゃもじなのだ！」

客（感動して涙を流す）

「本当にありがとうございます……！」

### シーン④：剛田の計画が暴走

（夜、剛田がしゃもじを使い、一人でご飯を食べている。）

剛田（満足そうに）

「やはりこの味、ゴージャスの極みだ……！」

（ふと何かを思いつく剛田。）

剛田

「このゴージャスな味をお近所さんにも届けよう！しゃもじを使って炊きたてご飯を配布するのだ！」

（近隣住民に配布計画を立て始める剛田。白金が駆け寄り、一喝する。）

白金

「やめてください！そんなことしたら絶対に騒ぎになります！」

剛田（残念そうに）

「そうか……ゴージャスの共有は難しいものだな。」

（最後に二人が店の看板を見上げるシーンで締めくくられる。）

剛田と白金（揃って）

「うーん、ゴージャス！」

（タイトルロゴが輝きながらエンドロールが流れる。）